



森村学園中等部・高等部

予測不可能な未来を見据えた教育を展開

——言語技術、外国語、PBL、ICTの4要素で未来志向型教育——

今回訪問する森村学園中等部・高等部（以下、森村学園）は、横浜市緑区に位置する創立110年を迎えた中高一貫校である。

創立者は、TOTOやノリタケなど日本のセラミック産業の創始者として、そして何よりも明治という時代に日米貿易に先鞭をつけて、伝説的人物となっている森村市左衛門（6代目）翁である。日本の国力を盛り立てようと、日本製の洋食器をアメリカに輸出し、激動の時代の大成功者となった一方で、彼が痛感したのは「人づくり」の大切さだったという。そこで日本女子大、慶應義塾大、北里研究所等に多大な資金援助を行い、その創

ている。19年度の海外大学合格者はゼロだったが、20年度は11名を教えた。

中には、「ザ・タイムズ・ハイヤーエデュケーション世界大学ランキング2020」で18位にランクされるカナダのトロント大学や34位のプリティッシュコロンビア大学など世界のトップ校も含まれている。

✓ 社会で生きる力をつける ICT教育

コロナのこともありICT環境を急ピッチで整え始めている学校も多い中、森村学園も力を入れている。機器の導入ひとつをとっても、「未来志向型教育」の視点で選び抜いたものを採用している。また、生徒用端末は、多くの学校が採用しているiPadやChromebookではなく、WindowsOSのSurface Go 2である。その大きな理由は、ICT教育を通してスムーズに社会へトランジションできることにある。世界的にみても多くの企業が

使用しているPCのOSはWindowsである。また、2in1PCを採用することでタイピングができ、Office系のソフトが習得できるという利点もあるという。

ICT教育推進部長の河合優次教諭は、「2in1PCを導入するのは、単に授業のツールとして置き換えるためだけではありません。『文房具』として、使っても使うことが目的。例えば、学校に関する連絡事項を個々人が持っているスマートフォンで閲覧したり、統一されていないルールで利用したりすると、学校生活とプライベートの棲み分けができないという問題点が出てくる。学校生活を送る上で、生徒にとっても保護者にとっても不安が残る部分ではないか。『学校専用2in1PC』を導入することは、そういった不安を解消し、日々の連絡事項の共有ツールとして、学校生活をより便利にするという大きな利点があります」と語る。さらに同校の強みは3名の教員が「Microsoft認定教育イノベーター（MIE

E）」の認定を受けていることだ。3名を中心にデジタルインテリジェンス（デジタル版IQ）の育成が進められている。

その一人である情報科の高田先生は「ICT教育を進める上で、日本の教育に足りないものがデジタルインテリジェンスです。モラルは学んでくるが、デジタルシチズンシップは学んでいません。本校では、言語技術により世界基準のコミュニケーションスキルを身につけると同時に、世界基準のデジタルインテリジェンスも身につけてもらいます」と話す。

そのデジタルシチズンシップとは、以下の八つである。「デジタルシチズンアイデンティティ」「スクリーンタイムの扱い」「ネットいじめの扱い」「サイバーセキュリティの扱い」「デジタル共感力」「デジタルフットプリントの扱い」「クリティカルシンキング」「プライバシーの扱い」。デジタルが当たり前にある時代に生きる子どもたちにとって今、最も必要なスキルの一つである。

「Morimura2.0」が19
「Morimura3.0」へ

現在、森村学園が推進する「未来志向型教育」は、言うならば「Morimura2.0」である。ではその先にある「Morimura3.0」とはどのようなものなのか。学校を訪問する中で面白い授業を見た。

授業のタイトルは「アカルイミライの作り方」。未来の仕事の変化を動画で見せ、「Society5.0」とは何かを各自で調べ、気づいたこと、思ったことをSurfaceにまとめ、クラス内で共有させる。そこで、クラスメイトの気づきや思ったことを見て、また自分のレポートにタイプする。そこからその場で「シンギュラリティ（技術的特異点）は2045年に来るのか」というアンケートを取り、スクリーンにリアルタイムで集計を表示した。

次にマサチューセッツ工科大学（MIT）の「モラルマシン」を使い、自動運転車を用いた人工知能の道徳的な意思決

定を体験させた。担当者は生徒たちに次の質問をする。

「自動運転車のブレーキが壊れてしまった。目の前には成人男性がいます。ハンドルを切れば牛がいます。あなたはどちらを犠牲にしますか」

生徒たちは当然のように「牛」と答える。すると担当者は「では、この国がインドゥー教徒が多い国だったら？」。そこで生徒は多くの気づきが生まれていった。この担当者は、自動運転技術を通じて自分のことだけでなく、より多角的視点をもつて物事を見てほしいと生徒へ伝えたかったのだ。そして「自動運転技術、AI技術で一番初めに情報を入れるのは誰なのか？」と生徒へ投げかけたのだ。この授業の続きが、コミュニケーションロボットのNAOを使ったプログラミン

グ授業だった。

このほか、東京大学教養学部主催の「高校生・大学生のための東京大学金曜特別講座」を学校ではもちろん、自宅で

も受講できるようにしている。さらに、台湾のIT大臣オードリ・タン氏の高校生のためのシンポジウムに参加するなど、最先端の情報をいつでも入れられるようにしている。また、生徒自身と与えられた情報だけをそのまま受け取るのではなく、自分に必要な情報かどうかを取捨選択できるように指導している。

未来を見据え、ICT環境を整備し、様々な取組を続ける森村学園。さらなる飛躍のために必要なのは、それぞれの効果測定だろう。定性的なものから定量的なものへとデータ化し、可視化することで、取組の効果が広く認知される。それにより、注目が集まり、今まで以上に教育界をリードする学校になるだろう。森村学園に今後も注目していきたい。

「学校所在地」
〒226-0026 横浜市緑区長津田町2695
TEL 045-984-2505
HP <https://www.morimura.ac.jp/jsh/>